

特集 1 地域の食材を生かせ  
農業・水産業との連携戦略

「ぶどうが全滅状態なのに、防風林代わりにしていた野生のさくらんぼだけはたくさん実をつけていました。この土地は高台で風通しがよく、さくらんぼ栽培に最適だった。」

北海道芦別市のJR上芦別駅から車で西へ約15分。大橋さくらんぼ園は自然豊かな高台にある。4・7haの広大な敷地に47種類1500本のさくらんぼの木が植えられていて、観光シーズンの7、8月には約1万5000人がさくらんぼ狩りに訪れる。

霜害に強いさくらんぼに注目

北海道のさくらんぼ栽培の歴史は古く、明治元(1868)年に函館を訪れていたプロシア(現ドイツ)人のR・ガルトネルが本国から取り寄せた苗で西洋農法により栽培を始めたことが始まりだという。それから150年近い時を経て、さくらんぼを生食だけでなく加工品の素材として使用し、業績を伸ばしている企業がある。

# 特集1 地域の食材を生かせ 農業・水産業との 連携戦略

地域ならではの優れた食材を活用し、独自の技術とアイデアで販路を切り開き売上を伸ばしている地域密着型の企業がある。各企業が挑む販路開拓への戦略を取材した。

## さくらんぼの加工品で オフシーズンの売上を確保

### 大橋さくらんぼ園

北海道芦別市

たのです」

そこで二代目の父・勝さんは栽培実をぶどうからさくらんぼへ切り替える決断をする。そんな中、47年、北海道新幹線計画が持ち上がる。「父はさくらんぼを東京方面へ出荷しようと考え、収穫量を確保するため周辺の人々にも苗を配っていました。」  
そうした話が芦別のまちに広がり、芦別に住む主婦たちから



「お金を払うから食べさせて」という依頼が舞い込むようになる。「さくらんぼ狩りが楽しめる観光農園は事業として成り立つのではないか。そう考えていろいろな農園へ視察に行ったのですが答えが見つからず、手探りで始めることになりました。」

勝さんはアイデアマンであった。雨に弱いさくらんぼの実を守るため、果樹を開閉型のビニールシートで覆った。すると雨でもぬれずにさくらんぼ狩りができると評判になった。「勝錦」から始まった品種も徐々に増やしていった。  
正数さんも後継者として観光農園で働き始め、当初は土産物の木彫りを担当した。  
「どんな商品をつくれれば売れるのか」ということばかりを考えていました。そのときの経験が加工品のアイデアに生きているのかもしれない



▲シーズンは7月上旬～8月下旬。農園はドームに覆われており雨でもさくらんぼ狩りができる  
◀最高級品種の「月山錦」「南陽」「サミット」の味と色を生かした人気の「さくらんぼジャム」

社名 有限会社大橋さくらんぼ園  
住所 北海道芦別市上芦別町469番地  
電話 0124-23-0654  
代表者 大橋 正数 代表取締役  
従業員 5人